

生徒昇降口に向かってすべての生徒が通っていくポイントに、毎朝立つようにしている。これが通常の状態であり、日常である。生徒一人一人に「おはよう」ではなく「おはようございます」と声をかける。反応は様々である。いつもしっかりとした声であいさつをしてくれる生徒、日によって元気度に違いがある生徒、少し照れるように軽く会釈をしていく生徒などである。

私のすぐ側には、生徒指導部長が立っている。彼とはあいさつをかわすだけでなく、何かしらの会話をしていく生徒が多い。「先生、今日の体育は何ですか」「先生、～」という具合である。彼から生徒に話しかける場合と、生徒から彼に話してくる場合とがある。中には、少し離れたところから「〇〇、大丈夫か～」と声をかけられる生徒もいる。何が大丈夫かという服装、身だしなみである。こういった生徒は、生徒指導部長からなるべく離れたルートを通して昇降口へと向かおうとする。かといって関係がわるいわけではない。すこぶるよい。

毎朝、電車に乗って4人で登校してくる3年生がいる。皆同じ中学校である。この4人は、必ず生徒指導部長の正面まで行き、あいさつをし、会話をする。そして次に、校長の正面に来て、またあいさつをし、会話をしてから昇降口へと向かう。これが日課である。いつの間にか、このスタイルが定着した。たまに、4人が3人になったりすると心配になる。学校を休むということだからである。

気がつくとき、登校してきた生徒にあいさつをするというよりは、あの生徒はまだ来ないかと、こちらが生徒を待っている状態になっていた。生徒が登校してくる時間帯は、その生徒によるが、日によってそんなに変わるものではない。来るはずの時間帯に来ない生徒がいると、今日は休みではないかと心配になる。

登校してくる生徒に、教員が一声かけるのはよく見る光景である。本校の生徒指導部長の場合は、声をかけるというよりは生徒と会話をしている。その時間は、生徒によって長い場合もあれば、短めの場合もある。会話をしていく生徒は、自然と笑顔になる。何か安心したように昇降口へと向かう。生徒と会話ができるということは、生徒のことをよく知っているということである。持っている情報が多いのである。実にいろいろなことを知っている。

ここ数日、1年生の担任の先生が、朝の登校指導に姿を見せていた。通常、学級担任は朝の登校指導は行わない。どうしたのかというと、毎朝、教室で朝のあいさつをするのだが、1年生のあいさつの声が小さいのが気になっていたそうである。そこで、朝の登校の様子はどうなのだろうと見に来たそうである。

確かに、1年生は現在のところ、数名を除いては元気のいい朝のあいさつとは言い難い。担任の先生が心配するのはもっともだが、何かしら特別なことでもしない限り、急に変わるものではない。高校生活に慣れ、生活のリズムができ、少しずつ自信がついてくると変わってくるのかもしれない。

今は、力をつけるとき、力を蓄えていくときである。夏休み後の2学期から徐々に徐々にあいさつができるように、あいさつの声が大きくなっていけばよい。改めて考えてみると、2・3年生に比べて、1年生は生徒指導部長との“会話”が少ない。いや、足りないのだと思う。さすがの生徒指導部長も1年生に関しては、まだまだ情報量が少ないのだろう。情報とは、学校での生活の様子のことである。

私も、声をかけて会話をする場合もあるのだが、生徒からすれば“たまに”である。とてもとても生徒指導部長の足元にも及ばない。だが、これからもできる限りお役に立ちたいと思う。